

推計量、年間1.5万→5万立方メートル

漂着ごみ実は3倍超

県が実施した海岸ごみの調査で目立ったカキ養殖に使用するパイプ（県提供）



大分県の海岸線に流れ着くごみの総量は年間約5万立方メートル。県が本年度実施した海岸ごみの調査で、これまで約1万5千立方メートル（標準的な25メートルプール23杯分）と推計していたごみの量が、実は3倍以上だったという実態が浮かび上がった。地域によって漂着しやすいごみの種類が異なっていることも分かり、県は「偏りごみの高いデータが得られた。調査結果を踏まえ、効果的なごみ対策を講じたい」としている。

県が初詳細調査、再算出

県によると、従来の推計値は2010年12月の簡易調査を基に算出していた。本年度、海岸ごみ対策を強化したことに伴い、地域ごとの特徴を把握しようと、詳しい調査を初めて実施した。調査地点は沿岸12市町村の17カ所。8、9、10、12月の4回、流れ着くごみの量、種類などを調べた。その結果、小林漁港海岸や松津漁港海岸（いずれも豊後高田市）、志生木漁港海岸（大分市）、東深江漁港海岸（臼杵市）、下梶寄海岸（佐伯市）でプラスチック類やゴム類など人工ごみが多く確認された。流木や海藻といった自然ごみは和間漁港海岸（宇佐市）と松津漁港海岸、志生木漁港海岸で多かった。全体的にはプラスチック類が多く、カキの養殖に使用するパイプが目立った。海外からの漂着ごみは人工ごみ全体の1%未満の量だったが、5割以上は県南部で見つかった。時期別では10月が多く、「台風が接近

したことに加え、海水浴期間外のため、清掃活動が減るなどしたため」と分析している。県は今回の調査結果を反映した海岸ごみマップを製作する。佐伯久県廃棄物対策課長は「ごみの漂着は潮の流れや風向き、地形など、さまざまな要因が影響している。各地域の特徴を頭に入れながら、市町村や各種団体、県民と連携し、美しい海岸づくりを推進したい」と話している。

(2015年2月23日朝刊23面)

大分県が2014年度実施した海岸ごみの調査で、これまでの推計の3倍以上の量だったという実態が浮かび上がりました。

①ごみが流れ着く時期は、何月が多いでしょう。またそれはなぜと考えられますか。

.....
.....
.....
.....

②14年度の調査でごみの総量は5万立方メートルと分かりましたが、これは25メートルプール何杯分に当たりますか。

.....
.....
.....
.....

③ごみを減らすため、こういった取り組みがよいと思いますか。考えてみよう。

.....
.....
.....
.....